令和２年（2020）３月26日　発　行
『大倉山論集』　第66輯　抜　刷
（公益財団法人　大倉精神文化研究所）

出会いの百年　日本とベンガル

～タゴール、武田ホリプロバ、村上春樹へ～

A Century of Meetings between Japan and Bengal

デヴァリナ・ムケルジー
注・解説　関 口 真 理

出会いの百年　日本とベンガル

～タゴール、武田ホリプロバ、そして村上春樹へ～

A Century of Meetings between Japan and Bengal

デヴァリナ・ムケルジー
注・解説　関 口 真 理

2018年（平成30年）10月24日、横浜市大倉山記念館ホールにおいて、公開講演会「タゴールから村上春樹へ―インド人の読書文化―」（主催：日本学術振興会科学研究費助成事業基礎研究（B）「現代インドの英語文学：インド社会の変容とグローバル化のはざまで」、共催：公益財団法人大倉精神文化研究所）が開催された。当日は、デヴァリナ・ムケルジーが英語で講演し、関口真理が通訳と解説を行った。

当日の登壇者。中央が講演者のデヴァリナ・ムケルジー、右隣が通訳の関口真理。

※ デヴァリナ・ムケルジー Devalina Mookerjee：インド、コルカタ出身。ジャダブプル大学で英文学を学ぶ。アメリカ、パデュー大学博士号（コミュニケーション学）。インドの大学で教鞭を取った後、ジャダブプル大学出版の発足当初からdevelopment editor（編集企画責任者）。https://jadunivpress.com/（ジャダブプル大学出版のウェブサイト）

※ 関口　真理：大妻女子大学、淑徳大学兼任講師（インド・南アジア近現代史）。

はじめに（Introduction）

日本とベンガルの間には、今日までの100年を超える年月に数多くの友情が結ばれてきた。その中には、20世紀初頭のラビンドラナート・タゴール（Rabindranath Tagore）と岡倉覚三（天心）のようによく知られたものがある。未来の我々のために、歴史がそのような出会いの記録を残してくれたお陰で。だが世の常として、今日ではほとんど知られていない、または忘れ去られてしまった出会いもある。当時の記憶や情報は、過去という霧の彼方に消え失せてしまったのだ。おそらくその数は、世によく知られた例よりもはるかに多いことだろう。

ここでは、タゴールを始めとする歴史的に大きな意味があると認識されている出会いと、ごく普通の人々の間の出会いの双方に触れ、武道、芸術、思想、言語、婚姻、通商などさまざまな分野から、ベンガルと日本が多面的に影響を与えあった100年を紡いでいく。ベンガルと日本が出会った黎明期に続いて、日本人と結婚した武田ホリプロバのこと、そして我々ジャダブプル大学出版が手掛けた、村上春樹著『海辺のカフカ』のベンガル語版の企画の経緯と翻訳の舞台裏の３つの事例について話を進めていきたい。中でもベンガル語訳『海辺のカフカ』は、村上作品としてはインド諸言語の中で初めて公式な翻訳権を得て出版された。これはジャダブプル大学出版にとって大きな誇りであると同時に、ベンガルと日本の交流の歴史の中でも記憶されるべき出来事であろうと考えている。

ジャダブプル大学はインドのコルカタにあり、植民地期からあった専門学校を母体として1955年に設立された公立の総合大学である。筆者が属するジャダブプル大学出版は、教員の論文や執筆物を製本販売していた部門を改組して2011年に発足した。ベンガル語と英語の書籍（様々な言語からベンガル語や英語への翻訳を含む）を軸として、従来の大学出版部の枠にとらわれない幅広い分野や新しい視点の出版活動を目指している。

1947年にイギリス領植民地から独立したインドは、広大な領土に数多くの民族、多様な宗教・文化伝統を持つコミュニティが共存している。1950年に施行されたインド憲法は、インドを多言語の国家であると位置づけている。具体的には、インドには「インド語」と呼ぶべき国語や共通言語は存在せず、民族やコミュニティがそれぞれに有する言語を保持することができるとする。現在でも、インドには数百あるいはそれ以上の言語が存在すると言われるのはこのためである。しかし現実には、国民の間に意思疎通の必要があるので、インド起源の言語では最大のヒンディー語と、イギリスがもたらした英語が国家の「公用語」と規定されている。また各地域（州）で最も有力な言語がその州の「公用語」となり、公立学校の教育や地方行政、地域の日常語として通用している。

コルカタが位置するベンガルは、ガンジス川の下流から河口一帯の広大な平野地方のことで、現在は西側がインドの西ベンガル州、東側がバングラデシュ（「ベンガル人の国」の意味）に分かれている。しかしインドとパキスタンが分離独立するまではベンガル語を話すベンガル民族が住む一つの地域とみなされてきた。ベンガル語はベンガル文字によって表記され、インド・南アジアにおいても有数の古い歴史と豊かな言語文化を持っている。現代のベンガル人も文学・文芸をこよなく愛する人々として知られている。このような背景を持つベンガルの人々は、アジアの国としてやはり古い文学の伝統を持つ日本に親近感や敬意を抱いてきたのである。

1．ベンガルと日本、黎明期の出会い
（Early encounters between Bengal and Japan）

一般的には、ベンガルと日本の関わりはラビンドラナート・タゴールが最初に日本を訪問した1916年頃に始まったとされている。この訪問に基づく彼の有名な“Japan Jatri[(1)]（日本紀行）”は1919年に出版された。しかし、

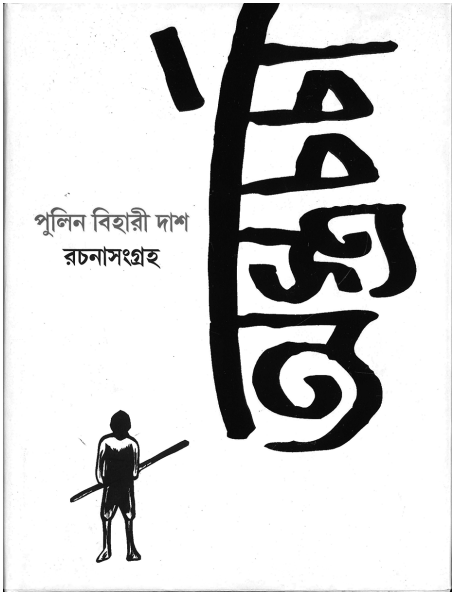
ベンガルと日本の接触は少なくともそれより20年遡った1893年には始まっている。思想家で宗教家のヴィヴェーカーナンダ（Vivekananda）がシカゴの万国宗教会議へ向かう途上長崎に到着し、その後は横浜のオリエンタル・ホテルにも滞在して、自らその記録を書き残している。

その後、ベンガルでは日本に対する関心が高まった。特にベンガル青年の間で、日本で産業技術の知識を学びたいという熱情が沸き起こった。イギリス植民地下の当時のインドでは、インド人がそのような知識を習得することはかなわなかったのである。そして実際に日本渡航を成し遂げた者たちは帰国後、独立前夜のベンガルで産業育成に貢献していく。こうした人々が興した事業として、カルカッタ・ポッタリー社（窯業）、カルカッタ・ケミカル社（化学）や、「ダックバック」の商標で今も防水関連の製品を生産するベンガル・ウオータープルーフ社などが知られている。

柔術とそこから発展した柔道は、ベンガルでも非常に人気がある。柔術は1905年にベンガルにもたらされた。タゴールは、岡倉天心の紹介で慶應義塾大学の卒業生である佐野甚之助（1882〜1938）を、自身が開学した学園シャンティニケタンのポート・ボボン（学習館の意味。初等、中等教育の学舎）に日本語教師として招聘した。ここで佐野は柔術[(2)]も合わせて指導し、ベンガルにおける日本武道の嚆矢となった。佐野の指導を受けたのはタゴール自身のほか、ショントシュ・モジュムダル（Santosh Majumdar、シャンティニケタンの草創期の学生で、タゴールの右腕として教育活動を支えた）、ノレンドロ・ナラヨン・ラエチョウドゥリ（Narendra Narayan Roy Choudhury、地主出身の民族主義者、植物学者）などであった。ラエチョウドゥリはプリン・ビハリ・ダーシュ（Pulin Bihari Das）を佐野に引き合わせるきっかけを作った。このダーシュは後に革命的な反植民地活動の組織オヌシロン・ショミティ（Anushilan Samity、錬成協会）の創設者となる。ショミティはベンガル近代史上で特筆される存在であることから、岡倉天心はベンガルにおいて、この結社の誕生に重要

な役割を果たしたという功績でも評価されている。

インドに導入された当初の柔術には、植民地統治下の現地の歴史と民族主義者たちの様々な想いが投影されている。タゴールとショントシュ・モジュムダルは先述の結社、オヌシロン・ショミティのメンバーに密かに柔術を指導していた。ショミティはイギリス植民地政府に対するテロや非合法活動を先導していた。また、カルカッタで私塾（アカデミー）を運営していたショロラ・デビ（Sarala Devi）は武術で植民地統治に抵抗することを支持し、塾生のベンガル青年たちに柔術やその他の戦闘技法を指導した。当時、独立運動を志す青年たちが得ることができたものは物心共に非常にわずかで、高価な武器を手にすることなどできるはずもなかったから、抵抗活動のためにはどんな手段でも用いねばならなかった。柔術の「泥臭い戦い方」は、植民地政府と闘う彼らにはまさにうってつけの手法であった。



【図１】 プリン・ビハリ・ダーシュ著、武術指南書“Astracharcha”表紙

このような困難な時代のベンガルで、柔術の用い方に関する記録が書き残されている。プリン・ビハリ・ダーシュによるベンガル古武術の指南書“Astracharcha”（2015年にジャダブプル大学出版より復刻版を刊行）である（【図１】）。本書の一章‘Churi o Jujitsu Shikkha’（ナイフと柔術の教習）には、インド伝来の護身術の中の多様なナイフさばきの技法とともに、柔術の教習法が10段階で紹介されている。本書はベンガル語で書かれて

いるが、本書によって専門用語だった柔術の用語がベンガル語の中に取り入れられた。これはダーシュの最も大きな功績の一つと言えるだろう。お陰で柔術はベンガルの人々にとって身近なものになり、柔術はベンガルに浸透しただけでなく、これらの用語は格闘や戦闘の文脈に用いられる一般的なベンガル語になっていったのである。

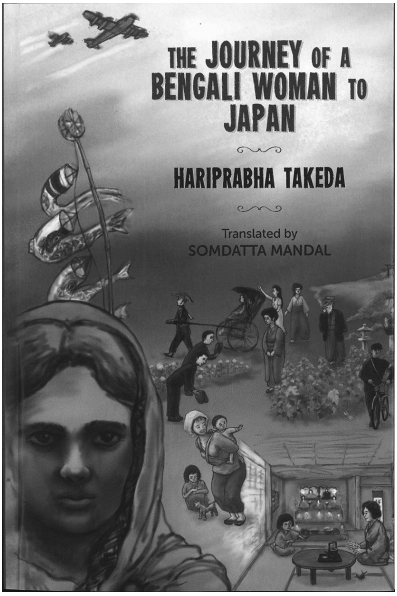
さらにタゴールは、1929年の来日に際して実業家で大倉精神文化研究所の創設者でもある大倉邦彦の紹介により講道館の嘉納治五郎館主に相談し、新たな武道指導者を要請した。こうして高垣信造（1898～1977）が教授としてシャンティニケタンに派遣されることになった。高垣のクラスで特筆すべきは、女性の参加があったことである。武道鍛錬への参加は、当時の若い女性たちを大いに鼓舞し、自信を抱かせた。彼女たちは反植民地運動において著しい働きをしただけでなく、彼女たちの活躍の姿は後の世のベンガル女性の指針にもなっていった。

2．日本とベンガル、庶民の出会い
（An ordinary encounter between Japan and Bengal）

ホリプロバ・ボシュ・モリク[(3)]（Hariprobha Basu Malik、日本の戸籍表記はハリプラバー・バス・マリク。武田ホリプロバ、1890～1972）は、ダッカのブラフマ・サマージ[(4)]を信奉する家庭に生まれたごく普通の若い女性であったが、日本人の武田和右衛門[(5)]（オエモンOemon Takeda、ベンガル語はウエモン・タケダとも。1874～1949）と出会って恋に落ち、1907年（明治40年）に結婚した。彼女は1912年（大正元年）に日本へと旅して、夫の家族に会い当時の日本の社会と生活を見聞した。100年前の日本は、インドから見れば全くの別世界であった。４か月に及ぶ洋行から戻った彼女はその思い出をまとめ、1915年（大正３年）に“Bangamohilar Japan

Jatra[6]（ベンガル婦人の日本紀行）”の題で出版する。当時の価格は４アンナであった[7]。

ホリプロバの日本紀行は、日本に関する文章を女性がベンガル語で書いたインド亜大陸で最初の例であるが、さらに言えば、本書の刊行はタゴールの1916年（大正４年）の記念すべき日本初訪問に先立つものである。ホリプロバは1912年の最初の旅を含め、少なくとも日本を３回訪問している。３回目の滞在中には、日本訪問中のスバス・チャンドラ・ボース（Subhas Chandra Bose）に面会しているし、「中村屋のボース」として知られるラース・ビハーリー・ボース（Rash Bihari Bose）の求めに応じて、第二次世界大戦下の戦時放送「ラジオ東京」（東京ローズで知られる）のベンガル語放送を担当した。ジャダブプル大学出版は1915年刊行の日本紀行に、未発表だった彼女の執筆物を加え、2019年に『ベンガル婦人の日本紀行』として刊行した[8][9]（【図２】）。



【図２】武田ホリプロバ著『ベンガル婦人の日本紀行』表紙

最初の日本行きでは、ホリプロバと和右衛門は1912年10月30日に船でダッカを発ち、約１か月半の旅を経て、12月13日に門司に到着した。その文章からは、育ちが良く、洗練されて、視野が広く観察眼の鋭い若い女性の姿がうかがえる。日本の婚家の彼女に対する歓待を感じ、彼らがかくも親身に面倒みてくれることに驚いている。その驚きは実は無理もないことである。当時のベンガルでは、女性は婚家で多大な、そして肉体も辛い仕事をし続けなくてはならない

ものだった。彼女が育って来た社会と文化の基準では、女性は幼い時から様々な技量を仕込まれるが、それらはすべて将来、婚家の新参者（嫁）になった時に家事を大切にし、それにいそしむための準備であるという考えであったのだから。ところが夫の実家はそうではなかった。

> 皆が私に示した奇妙なふるまいには驚きました。義母と親戚たちは、明らかに私の苦労が少なくて済むようにと尽くしてくれます。義母は私のためにあらゆる事をしてくれます。たとえば、私が自分の衣類を洗濯しようと井戸に行くと、義母はそれを全部取り上げて彼女自身で洗ってしまいます。私が引き止めると『あなたにはここの寒さは応えるでしょう。風邪をひいてしまいますよ』と言うのです。彼女は六十歳ですが、私たちの二人、三人分より働きます。私が料理とか掃除とか、何か家事をしようとすると、私を脇にどけて自分でしてしまいます。彼女は決して私に冷たい水を使わせません。いつも私が美味しく食べられるものを買ったり、探したり気にかけています。この寒い天候のために私がストーブの側に座っていると、毛布やら毛の織物やらを着せ掛けてくれ、お風呂では背中を流してくれます。私としては何もせずに座っていることなどできないのですが、義母は着物や何かを持って来て、それならこれを縫っていなさい、と言います。彼女はまた、お祭りや何かの行事など一見の価値がある場所に連れて行ってくれます。(10)

これらの情景から、二つの文化の間に絆が生まれていることがわかる。年配の日本婦人は、一世紀の時が経った今ではもう故人だけれど、言葉も通じない異国出身の嫁のことを案じるあまり、インドと同じように嫁姑の関係があるはずの日本の日常感覚を忘れてしまったかのようだ。しかし、老婦人にはこの若い娘が寒がっていることはよくわかる。しかも、娘はここでは全くのよそ者なのだ。婦人が娘にありったけの愛情を注がない理由があるだろうか。武田ホリプロバの語りは、タゴールや岡倉天心のような

高尚な理念を論じているわけではない。けれども、人と人が心から思いやるような本物の触れ合いが生じれば、多くの境界を飛び越えてしまうことや、人間の本質は目に見えないけれど基本は同じである、ということを教えてくれる。

これがホリプロバの最初の日本訪問であった。武田夫妻はこの旅から戻って再びダッカに住み、和右衛門は石鹸工場を経営していた。この後、夫妻は少なくとも日本を二回訪問している。1924年（大正13年）には、前年に発生した関東大震災後の一族の安否確認のため、三度目は、第二次世界大戦に際して、天皇がすべての海外在住の日本国民に対して帰国を促したことに応じたものである（ホリプロバの記述であるが、歴史事実として明確に裏付ける資料は見つかっていない）。夫妻は1941年（昭和16年）11月21日に神戸に到着しているが、当時の日本は非常に困難な時期にあり、ホリプロバも日本で、幸福だった前回とは全く違った経験をすることになる。(11)

彼女は、戦時ラジオ放送の「ラジオ東京」でベンガル語放送のアナウンサーを担当した。放送収録日には、灯火管制下の夜闇の中を自宅から放送局まで歩いて向かった。万が一に備え、サリーのペチコート（和服の腰巻に相当する下着）に隠しポケットを付け、パスポートと貴重品を肌身離さず持ち歩いていたという。はるか遠い故郷のベンガルでは、彼女の一番下の妹(12)が、イギリス植民地下のインドでは敵国放送として禁じられていた姉の声を隠れて密かに聞き、安堵のため息を漏らしていた。姉の声が流れて来る限りは、彼女が日本で生きていることが確かめられたのだから。

3．村上春樹をベンガル語に訳す
（Translating Murakami in Bengal）

それでは一世紀の時を飛び越えて、ベンガル語版の村上春樹の話に移ろ

う。ここからは筆者もその一端に加わったベンガルと日本の出会いの物語である。ジャダブプル大学出版の村上春樹への旅は、この出版部門の設立から3年経った2014年、ジャダブプル大学工学部の教授であり、日本語教師、日本語翻訳者であるアビジット・ムケルジー（オビジット・ムカジ、Abhijit Mukerjee）博士が我々に、『海辺のカフカ』[13]をベンガル語に翻訳したい、と言った時に始まる。彼は電子工学が専門であるが、日本留学をきっかけに学び始めた日本語の専門家でもあり、大学では日本語も教え、日本語の翻訳活動もしていた。そして何よりも村上春樹の熱心な読者であった。

『海辺のカフカ』には、ベンガル語の読者を引き付ける理由がいくつもある。舞台は現代の日本。現代に生き残った古い文化が、グローバル化の中で常に緊張状態に置かれている、そのような場所の一つである。急激な変化に追い立てられ、安らぎを感じられるわずかな隙もなく、居場所もなく、自分が何者であるかを確かめることもできない。異なる文化、異なる世界のせめぎ合いの中で常にバランスを取りながら進み、それぞれの世界ごとに違うルールにどうやって適応し、次々に現れる境界をどう越えて行けばよいのかに戸惑っている。都会と田舎の関わり、言い換えれば、人間は自然とどう向き合っているか。これはベンガル語の読者にとっても身近な課題なのである。『海辺のカフカ』の中に描かれる都会的な、あるいは機械的なものは、緑の木々や開けた空の霊的な穏やかさの対極にある。これは、東京や大阪、あるいは世界の他の都市と同じように、コルカタでも同じだ。

『海辺のカフカ』の重要な登場人物であるナカタさんは、ベンガルの読者にとっても気になる存在である。ベンガルの伝統文化の中にも、聖者や人知では測り知れない存在が息づいて来た。神懸かりや、特別な能力を持った人のことを、ベンガルの読者も自然に受け入れることができる。たとえば、ベンガル人にとって最も偉大な精神的支柱であるラーマクリシュ

ナ（Ramakrishna Pramahamsa、普遍主義の思想家、カーリー女神の信徒であり、本文の冒頭でも触れた哲人ヴィヴェーカーナンダの師）が少年だった頃、雨季の雲が低く垂れこめる下、雨水に満たされた田んぼの原を歩いている時、神秘的なまでに美しい白い鶴の一群が彼の頭上を渡って行くのを目にした彼は、気を失って大地に倒れた。この逸話は、ラーマクリシュナの精神世界がどのように形成されたかを知る一助にならないだろうか。

すでに刊行されていた英語訳によって『海辺のカフカ』はインドでも良く知られていた。(14) そして、歴史的に築かれて来た日本とベンガルの絆がある。『海辺のカフカ』をオリジナルの日本語からベンガル語にしようという我々の計画は、当初から高揚感に満ちていた。まずは村上春樹作品の翻訳権管理者（エージェント）との交渉に入る。ジャダブプル大学出版はこれほどの大手を相手にするにはまだ経験が浅く、一つ一つのステップを進めることは同時にノウハウを学ぶことでもあった。交渉は長引き、１年にも及んだがとうとう翻訳許可を得ることができた。また同時に、村上作品の翻訳本の表紙は、村上氏本人の承認を得たものでなければならない、ということがエージェントから知らされた。そこで何点かの表紙デザイン案（【図３】）

【図３】採用にならなかった表紙案の例。採用デザインも含め、当時ジャダブプル大学に所属していたアーティストが手掛けた。

を用意してメールで送ると、村上氏が気に入って選んだという作品が知らされた。さらに村上氏は、表紙の他に我々が独自に発案したブックデザインのアイディアも心よく認めてくれた。それは本の各ページの端に小さな黒猫のイラストがあり、パラパラ漫画のようにページを繰ると猫がページの縁を上下に移動していくという仕掛けである。

我々は、非常に小さな出版社である。予算は大学から出ているが大きな額ではなく、複数の企画を手掛ければ、一つの本に当てられる予算は小さい。『海辺のカフカ』の場合、これほどの企画となれば大学から与えられた予算の範囲で賄うことは難しい。しかし我々はどんな本であっても、できる限り良いものを作りたいと思っている。まして人々はこの本について、これまで様々な言語に訳された他の村上作品とその出来ばえを比較するに違いない。つまり、この企画には我々の威信がかかっているのだ。そこで我々は、日本の国際交流基金による外国語翻訳出版助成を申請することにした。[15]

もし、この申請書を作成している最中に我々のオフィスを覗いたとすれば、奇妙な光景を目にすることができただろう。１人の日本人も含まない３名が、英語とベンガル語で相談しながら、まずは鉛筆の下書きで書類を埋めようと格闘している。オビジット・バブー（先生への親愛を込めたベンガル語の呼び方）は講義を終えるとオフィスにやって来て、日本語で書かれた助成金申請の書類を訳す。申請用紙には「ホチキス留め不可」という厄介な注意書きがあった。そこで我々は用紙の角に穴を開け、我々の間では日常的に使われている麻糸の紐で綴じることにした。創設から間もない我らが出版社にとっては、初めての本格的な助成金の申請だった。厄介な作業ではあったが我々はそこから多くを学んだし、実を言えばその段取りの一つ一つを楽しみもしたのだった。

申請書類の準備の傍らで、オビジット先生は小説本文の翻訳を始めていた。先生は時々オフィスに、日本で出版された上下二巻の美しい装丁の

『海辺のカフカ』を持って来ることがあった。我々はそうした書籍本体の出来栄えにも魅了された。先生は、日本語とベンガル語の辞書や様々な参考文献を周囲に置いて、日本語オリジナルの１ページ１ページを食い入るように見つめていた。彼は時々、持参した拡大鏡で、気になる漢字を一文字一文字吟味することさえあった。翻訳中に彼が書き留めたメモや注記は膨大な量になった。こうして翻訳はゆっくりと、しかし堅実に進んでいった。

村上作品を翻訳するにあたって直面した課題は、文脈や状況に応じて一つ一つの文章ごとに訳を工夫しなくてはならないことだった。たとえば、樹木の種類、日本語の文章がどうしてもベンガル語の文法表現では表せない場合、食事や食物をどう訳すか、音だけでなく漢字にも意味がある日本人の名前、建築や室内装飾、調度をどのように表すか、といったことである。

樹木や自然のことを訳すのは特に難しかった。日本とベンガルはお互い地球上の遠く離れた場所にあり、その自然環境や植生は全く異なっている。先生はベンガルに生育している植物を調べあげ、できるだけ近いものを探しだそうとした。彼はまず、日本でその植物が生えている様子の写真を何枚も探し出した。次にその写真を樹木に詳しいインド人に見せて、こちらの木で一番似ていると思われるものを挙げてもらった。原文で「葉が光っている」なのか「光沢のある葉」なのかの違いも、似たもの探しの重要な手がかりになると考えていた。

全編のそこここに散見される文法や言葉遣いの違いも、しばしば翻訳作業の手を止めさせた。会話、特にごく普通に使われる表現ほど苦労が多かったと先生は振り返っている。たとえば「なんだか」という言葉が表す状態は、元の日本語でも何通りかの解釈ができるだろう。それをベンガル語にするとしたら、‘ki hocchay/hoyechay’ならば「なにかある」、‘ki byapaar’は「なにかがある、でもはっきりしない」、‘hyan bolun’は

「なに？どうぞ話して」などの可能性が考えられる。訳している「なんだか」がどの意味なのかは、日本語でも、ベンガル語でも、会話がなされている状況から判断することが重要であるが、原文がその状況を詳細に説明しているとは限らない。自分が持っている似たような経験に照らして、読者が意味を判断するということもありうる。言葉遣いの解釈とはそういうことを言っているのである。

食事、食物の翻訳にも大いに難儀した。日本とベンガルでは基本的な食材、米、魚、野菜といった部分では共通点も多い。しかし、それを使って調理されたものになると、寿司にしろスキヤキにしろ、ベンガルには無い、まったく違ったものになる。ちなみに“Bong Eats（https://www.bongeats.com）”という動画サイトではベンガル料理を調理の様子から見ることができるので、寿司やスキヤキになる食材がベンガルではどんな料理になるのか、その目で確かめていただきたい。

そして、たとえベンガル料理も日本料理も同じように美味だとしても、文章から実際の味を知ることはできない。だから先生は長い時間をかけて訳語を選び、文を吟味しながら、文章の流れを折ることがないよう、日本

【図４】ベンガル語訳『海辺のカフカ（Samudratate Kafka）』表紙

の食物を我々の知る食物に置き換えていった。それでも言葉の置き換えには限界がある。そこで彼はいくつかの食物に関しては日本語の音のまま表記し、どんなものかを説明した文を補いながら訳文を構成した。

漢字で書かれた言葉で、その漢字が示す意味も言葉の意味に含まれているものは、ベンガル語では表現することができない。漢字で書かれた日本人の名前はその最たる例だが、さらに古典文学の作者の名前のように、漢字そのものが古い形で古い音や古い意味を持っているものはさらに難しい。当たり前のことだが、ベンガル語の文では名前は音でしか表すことができないから、少なくとも音として原語に忠実に表記されなければならない。しかし特に古い名前では、使われた漢字の一般的な発音のとおりには読まないものがある（実朝＝さねとも、といった例）。オビジット先生はいろいろ迷って、英語訳を参照してみた。すると多くの例で、該当する名前を一部、あるいは全部、違うものに変えてしまっていることを発見した。仕方なく先生は事典を繰り、古典歌人の名前や歌の一つ一つに当たって、その文字をどのように発音しているかを調べ上げ、その漢字が名前としてどう読まれる可能性があるのか、ベンガル語の読み手のためにはどんなベンガル語の音で表記したらよいのかを自力で検討した。

建築や日本家屋の内装の表現についても、先生は苦労を吐露している。日本建築、その美の観念、基準には独特のものがあり、ベンガル語のニュアンスでそれを表すことが難しかった。その結果、柱とか装飾、家具といったものの造作を、各部位にわたってとにかく細かく描写するほかに手段がなかった。すると短かった原文が、どうしても何行にもわたる長い訳文になってしまうのであった。

むすび（Conclusion）

翻訳とは常に二つの異なる文化現象が語り合うことであり、言語はその場における信号、符号としての役割を果たす。二つの符号は本来別個のものとはいえ、翻訳が機能するためには共通する何らかの基盤を見出さねばならない。この過程は、人と人との関係であろうと、国と国の関係であろうと同じである。ベンガルと日本の関わりは、互いを意識するようになってすでに一世紀を越える年月が経ち、その関わりは多方面に及び、その多様さはますます豊かに増えていくことだろう。

こうした数多くのつながりの物語は、時間をかけて織りなされてきたものである。今日、ベンガルには数多くの柔道教室があるが、そのすべてが元をたどれば佐野甚之助がインドに来たこと、また一世紀前の大倉邦彦とタゴールの友情の恩恵にあずかっているわけである。「中村屋のボース」として知られるラース・ビハーリー・ボースのインドカリーはレストランの定番メニューとして日本帰化を果たした。ホリプロバが明瞭に語る声は、今ベンガル語から英語となってより多くの人々に知られるようになり、人間関係というものは愛と理解の上に成り立つのだという究極の理を私たちに思い出させてくれる。今日と同様に百年前もそのようであったに違いない。

村上春樹作品の翻訳では、翻訳のひとつひとつの過程に真摯に取り組んでいくうち、おのずと作品を生み出した言語や文化に対する敬意が生まれた。私たちの努力は『海辺のカフカ』のベンガル語訳“Samudratate Kafka”という重厚な全２巻の本に結実し、高い評価を得ることができた。[(16)] この挑戦は我々に大きな充足感を与えてくれた。ジャダブプル大学出版にとってこれは日本に関わる最初の企画であり、さらに将来へ繋がる第一歩と考えている。

注

（1）　稲津紀三訳「日本の旅」、タゴール記念会編『タゴールと日本』（タゴール記念会、1961年）、森本達雄訳「日本紀行」、『タゴール著作集』第10巻（第三文明社、1987年）などの訳がある。

（2）　岡倉天心と嘉納治五郎や福沢諭吉との交友から佐野が見いだされたことを考慮すれば「柔道」とすべきところであるが、当時のベンガルでは「柔術」と紹介されていた。ここでは筆者が記述したまま「柔術」とした。

（3）　ホリプロバの父は警察官であったが、後に石鹸製造業を興し実業家に転じた。母はブラフマ・サマージの理念による社会奉仕活動に熱心なことで知られていた。ホリプロバは夫妻の６人の子供の長子である。

（4）　ヒンドゥー教を基盤としたインドの思想・社会を近代的に改革することを目指した宗教組織とその活動。外国人で異教徒であった武田和右衛門を娘に配することを最初に意図したのはホリプロバの両親であったとされるが、これは当時のインド一般の価値観では考えられないことであり、一家にブラフマ・サマージの背景があってこその結婚であったと考えることができるだろう。

（5）　武田和右衛門は愛知県の出身で、1903年頃に日本を離れたとされる。和右衛門は二人が出会った当時、ホリプロバの父の石鹸工場で働いていたが、その後に独立して自身の石鹸製造会社を持った。

（6）　“Bangamohilar Japan Jatra”（1915）のオリジナル印刷物が現存しているかは確認されていないが、記録はイギリスにある英領インド統治時代の資料を収蔵したインディア・オフィス・ライブラリーにマイクロデータとして保管されている。バングラデシュのジャーナリスト、マンズルール・ハク（モンジュルル・ホック、Manzurul Haq）がこれを発見し、1999年にダッカでそのコピーを出版した。こうしてベンガル語圏ではホリプロバの存在が「再発見」されることになり、その後、主にバングラデシュとインドの研究者やジャーナリストによっていくつもの論考やドキュメンタリー映像などが発表されている。

　日本では、「あるベンガル婦人の日本訪問記」（富井敬訳、『遡河10号』、遡河編集部、1999年）として、日本に関する記載部分を抜き出した日本語抄訳とホリプロバについての紹介が行われた。続いて「あるベンガル婦人の日本訪問記（続編）」（富井敬訳、『遡河13号』、遡河編集部、2002年）として、正編に収録されなかった部分の翻訳が掲載された。

（7）　ルピーはインドの通貨。１ルピー＝16アンナで、1915年頃の英領インドの

「国内郵便」料金が１アンナであった。

（８）Hariprobha Takeda, Somdatta Mandal(translation), “The Journey of a Bengali Woman to Japan & Other Essays“, Jadavpur University Press, 2019

本書は1915年のホリプロバの日本紀行と、これまで出版されたことのなかったホリプロバの著作（第二次世界大戦中と終戦直後の日本滞在記（1941～1948)、日本の女性と子供の教育に関する論考）の３本のベンガル語著作を英語に訳したものと、マンズルール・ハクを始めとするホリプロバに関する代表的な論考（英語）をまとめたものである。翻訳者のショムドット・モンドルはインド、ヴィシュヴァバーラティ大学の英語教授。

（９）ジャダブプル大学版の『ベンガル婦人の日本紀行』の校正の段階で、関口真理が日本に関する記述の事実関係のチェックを行った。その過程で武田和右衛門の武田家が、現在も和右衛門の出身地である愛知県に居住していることがわかった。同家の古い戸籍によって、これまでホリプロバの本や親族の言葉からオエモン（ウエモン）・タケダとのみ知られてきたこの人物の正式な名が武田和右衛門であることも判明した。この戸籍には和右衛門の生没年月日、ホリプロバの生年月日、両名の結婚の年月日、結婚登記時の英領インドにおける居住地などの記載があった。

これまでのホリプロバ研究では、和右衛門は「困窮する農村から活路を見出すために海外に向かった」と解釈されていた。しかし和右衛門は比較的裕福な農家の４人兄弟の長男で、本来は家を継ぐべき立場にあった。和右衛門が海外渡航したため武田家は次男が継いでいる。また当時この地域の農村では、家督のない次男以下にも名古屋圏や近郊の都市など、村からの通勤が可能であったり、近距離への移住で十分な勤務先が豊富にあり、海外移民の事例はほとんど見られない。和右衛門は海外で成功するという強い志を持ってインド渡航を実行した、この時代とこの地域においては稀な例と見るべきではないだろうか。

インドで成功した和右衛門の姿に影響を受けたのか、おそらくホリプロバと和右衛門の最初の日本訪問がきっかけとなって、和右衛門の末弟の藤市（1885年～没年不明）がインドの兄夫婦に合流し、ホリプロバの親族のインド女性と結婚している（1922年)。

なお、武田家の戸籍は戦後の戸籍法に合わせて昭和30年代に刷新された。その時点ですでにインドとは没交渉になっていたらしく、当時はまだ健在であったホリプロバや、藤市とその家族は一斉に除籍となり、日本側の資料か

ら彼らのその後を辿ることはできなくなった。

インドのホリプロバの親族によれば、和右衛門とホリプロバには子供がいなかった。また藤市とインド人の妻には１男４女が生まれ（日本の戸籍にも記載）、３人の娘が成人。うち２人はインド人と結婚し、１人は未婚であったという。

また、武田和右衛門はホリプロバの文章、及びインドの親族によってOemonと呼ばれている。和右衛門はおそらく「かずうえもんKazu-uemon（かずえもんKazuemon）」であるが、ベンガル語ではズ音がしばしばジュ音となる。すなわち「カジュエモン」であるが、これさえも呼びにくかったのであろうか、「右衛門（ウエモン）」の部分だけが「Oemonウェモン、オエモン」として定着したのかもしれない。

また武田藤市も、インドでは「とういち」ではなく「Toshan（トーシャン）」と呼ばれていた。「藤さん」が「トーシャン」になったものであろうか。

(10) この時は少なくとも1912年12月17日から1913年１月半ばにかけて和右衛門の実家に滞在し、その後、東京や日光を廻っている。武田夫妻の離日は４月12日であるが、その間に実家を再訪しているかどうかの明確な記述はない。

(11) 和右衛門のダッカの石鹸製造業は成功していたようで、かなり裕福な暮らしをしていたことがインドの親族によって証言されている。しかし戦争中の日本への帰国と日本の敗戦を経て、さらに英領インドがインドとパキスタンに分離独立（ダッカは東パキスタンへ）するという情勢の激変から、現地の財産とインド滞在資格を失った。また英領インド人として日本へ出国したホリプロバの身分資格も宙に浮いた形となった。終戦後、和右衛門は敗戦の痛手から心身ともに急激に衰え、ホリプロバが表に立っての外交交渉で夫婦の身分資格の回復を働きかけた。1948年、ダッカではなく親族のいるインドの西ベンガルに受け入れられて夫婦で帰国を果たしたが、まもなく和右衛門はそこで亡くなった。

(12) オスルバラ・ダシュグプト（Ashrubala Dasgupta）。長じて医師となり、当時の数少ない女性医師として地域医療に尽力した。1948年に武田夫妻がインドに帰国する際の身元保証人となった。オスルバラは姉に先立って他界したため、オスルバラの息子とその妻がホリプロバの最晩年の世話をした。

(13) 2002年に発表された長編小説。現代の日本を舞台とし、15歳の家出少年カフカと知的障害があるが不思議な能力と純朴な人柄を持つナカタさんを軸に、ギリシャ悲劇や日本の古典を織り込みながら幻想的に展開する物語。

(14) インド各地の書店で、村上春樹は主要な作品の英語訳が揃い、店頭に平積み

になるほど人気を集めている。インドでは外国文学に関心を持つような読者層の多くがミドルクラス以上の出身であり、幼少期から英語で教育を受けた高学歴層である。こうした人々はインドの言語で日常会話をしているが、読み書きについてはほとんど英語しか使わない（使えない）。最近のインドでは、東野圭吾などの日本の最新ミステリも人気を集めているが、そのほとんどが英米の英語訳版をインド向けに印刷したものである。

ただし、民族の言語文化が根強いベンガルでは、英語同様にベンガル語の読み書きに優れた高学歴者が少なくない。『海辺のカフカ』のベンガル語訳の出版にはこのようなベンガルの言語文化の背景があり、『海辺のカフカ』を英語でもベンガル語でも読んでみたいという読者と、主にベンガル語で読み書きするが優れた文学に深い愛着をもっている読者と、どちらをも想定することができる。

(15) 独立行政法人国際交流基金（The Japan Foundation）が、日本理解や日本研究の一助となるよう、日本語の書籍を外国語に翻訳・出版する海外の出版社に対して設けた助成金制度。

(16) ベンガル語訳『海辺のカフカ』は１巻が2016年、２巻が2017年に刊行された。

※ 本稿ではベンガルの人名・地名などでベンガル語のカナ表記を採用したが、タゴール、チャンドラ・ボースなど日本ですでに通用する表記があるものはこの限りではない。